

キョウコ・モリの最新作に見られる変容

渡 辺 佳 余 子

1957年、神戸に生まれたキョウコ・モリは、今年で51歳になった。20歳のときにアメリカに渡り、以後30年以上アメリカで暮らしを続けているのだから、日本での暮らしよりもはるかにアメリカでの暮らしが長くなっている。モリは、ウィスコンシン州のセント・ノーバート大学で英語（英文学と創作）を教えながら、詩や小説を書いていたが、1993年に発表された処女作、*Shizuko's Daughter*は、ニューヨーク・タイムズの書評でも絶賛され、日本においても『シズコズドーター』として訳され、評判になった。このような彼女の存在については、日本でも主力新聞などで大きく報道され、一躍有名人になったのだが、あれからすでに15年という歳月が経った。

モリは現在、アメリカでも最も古い歴史を持つハーバード大学で教鞭を執っている。このことはモリがアメリカで確固たる社会的な立場を持って暮らしていることになる。このように、一見成功者であるはずのモリではあったが、彼女のこれまでの小説や自伝、そして比較文学論を読むと、彼女が、日本における過去の忌まわしい記憶に囚われ続けていることがわかる。アメリカ社会で完全に安定した立場にあってから久しい今現在、モリはその過去の記憶から解放されることができたのだろうか。

本論では、モリのこれまでの小説、*Shizuko's Daughter*（『シズコズドーター』）、*One Bird*（1995年『めぐみ』）、自伝、*The Dream of Water*（1995年）、比較文化論 *Polite Lies* 1997年『悲しい嘘』）、そして、詩集 *Fall Out*（1994年）に続いて出版された最新作 *Stone Field, True Arrow*（2000年）を分析し、モリの作品を描く姿勢に変化が見られたのかどうかについて述べる¹⁾。

最新作、*Stone Field, True Arrow* の35歳で織物工芸家の主人公Mayaは、10歳のとき、両親が離婚して母親に引き取られる。“The family name leading the given, it is the name Maya lost at ten.”²⁾もとの名前は石田真弓、この小説のタイトルを表しているのだが、アメリカで暮らす母親に引き取られてマヤと呼ばれるようになり、父方の姓、インダを名乗ることもできない。マヤの母親はアメリカ人の年下の夫、Nate Mueller と3度目の結婚をしており、現在はKay Hayashi Mueller となっている。マヤの失われた姓名がそのままこの小説のタイトルになっていることから、主人公が父親と無理やりに引き裂かれた悲しみが全編をおおう、モリの珠玉の作品となっている³⁾。

1. 母親との確執

これまでモリは作品の全てにおいて父親に代表される日本人男性を激しく非難してきており、一方、自伝などでも、モリが14歳のとき自殺した母親に徹底的に同情している。これまでの2つの小説においても、母親を寡黙で何事も我慢する理想的な日本女性として描いてきた。しかし、今回の最新作において初めて父親と母親の描き方が逆転されている。母親は世間で成功したタイプでアメ

リカの大学の政治学教授であった人であり、実践的な考えをし、世間で成功していない人間を蔑むような人である。織物工芸家の娘の生活に対しても批判的であり、娘に“Even with your art degree, you could have done better. It still isn't too late to go into graphic design or museum work. You can do something more professional.” (37) と不満を述べる。このように言われて、マヤは“I'm happy doing what I do……I wish you wouldn't talk about it anymore” (37) と言明する。

マヤは、このような恐るべき母親が編み物の巨大な針、野球のバット、金属製の定規のような硬くていかめしいものを振りかざしてマヤを追いかけてくる夢をほとんど毎晩見ている時期があった。マヤがこの母親について“Not everyone is capable of rage that leaves a mark on the universe, strong enough to make people sick. Her mother was about the only person who had anger like that.” (66) と言い、母親の執念深い粘着質の性格を批判する。

マヤは、やがて恋をするようになるEricと知り合った頃、彼から“Do you have family nearby?” と聞かれ、母親ケイについて次のように語る。

Not really. My mother lives near Chicago with her third husband, but I don't see her often. We don't get along. The last time I saw her, I left her at a restaurant on the north side of Chicago and drove away. She didn't even have a car there. (92)

ここには、母親とは滅多に会わないこと、かつて二人が激しい言い争いをしたことなどが描かれている。だが、父親については、“My father——her first husband——lived in Japan, but he died recently, and I don't have any brothers or sisters.” (92) と語り、深く愛していた父親も他界し、完全に孤独であることを述べる。それでも“Maya tries to laugh as if to say her life isn't as sad as it sounds.” (92) と、自分はそれでもそれほど不幸ではないと主張するかのように振舞う。エリックは強がっているマヤに“You've been through a lot.” (92) と声をかけるのだが、マヤは思わず泣きそうになってしまう。ここでは、マヤは、エリックのやさしさに触れ、父親のことを思いだす。これは、やがて二人が恋に落ちることになるのは、エリックが亡くなった父親と同質の心のやさしさを持っているからであることが示唆されている。

The kindness in his voice almost brings tears to her eyes. Closing her eyes, she pictures her father from twenty-five years ago, standing at the airport in his black coat. He would have been thirty-five, her age now. How could he say good-bye to her, knowing they would never meet again? (92)

この小説の最終部においても再び、マヤがエリックを恋するようになるのは、彼が亡き父親を思いおこさせるからであることが描かれる。

Eric leans toward her until his forehead is touching hers. It's what her father used to do to see if she had a fever. “You feel a little warm,” he would say, going to get a thermometer, or, “You feel just fine. Nothing wrong with you. (200)

このように、主人公のマヤにとって、母親のケイは憎むべき相手であり、マヤが最愛の父親の思い出と共に生きていることが述べられている。これは、これまでのモリの男女の描き方が逆転されていることになる。

2. 父親の思い出

マヤは、父の影響で織物工芸家になったことを“My father was a Japanese painter…but he was trained in Western-style art. He studied in Philadelphia. I suppose his influences are mine.” (34) と語る。彼女はいつも、癌を患って60歳のときに永眠した父親の思い出と共にある。

She remembered a braided cord her father had made from the first cutting of her baby hair. He kept it in a blue porcelain box in his drawer, along with the other things he treasured (49)

マヤの父親が彼女の幼い頃の髪の毛と共に大切にしているものには、「(マヤの両親の) 結婚式の写真、結婚1年目の記念日に、元の妻だったケイがくれた緑色のめうのでできたカフスボタン飾り、フィラデルフィアで自分の作品が展示されると記されているはがき、彼が18歳のときすなわちアメリカ留学する2ヶ月前に他界した母の形見であるアメジストのできた数珠など」であり、これらが青い陶器の宝箱に入れられ引き出し内に大切に保管されていた。父はこの宝箱から一つ一つ取り出しては、それぞれのエピソードを聞かせてくれたものだった。

マヤは日本から届いたクボという男性からの手紙をなかなか開けることができないままだったが、ある日、開けてみるとそれは予想どおり、マヤが一番おそれたこと、父親の死についての知らせであった。しかし、そこからは、父親がどのくらいの期間病んでいたのか、癌はどこにできたものだったのか、父親の最後の数ヶ月はどのようなものだったのか、彼が病院か家のどちらで息を引き取ったのか、彼が臨終の床で何か言い残したことがあったのかどうかについては知ることはできなかった。このことを知りたいと思い、マヤは日本語のへたな手書きでクボに返事を書く。

マヤは、父親が空港にマヤを連れて、彼女をアメリカで暮らす母親のところに見送ったときの光景をいつも思いだす。

Her father is standing alone in a dark, desolate place, his right arm extended in a wave. The brown kimono he is wearing makes him look like a tree, his arm a bare branch in winter. Though he keeps waving, Maya can only guess what he is trying to tell her. Good-bye, he must be saying. *I'll never see you again.* (85) (イタリックス 原文)

マヤが思いだすのは、この空港の光景だけではない。夜、星空を眺めるとき、マヤは思う、“Her father might have gone out to see the same comet in Japan if he'd lived.” (102) 二人は昔、そろって夜空を見上げ、皆既月食を眺めたことが描かれており、二人が本当に感性の近い親子であったことが示唆されている。

そのため、マヤは二人が最後に別れたときの光景を幾重にも覚えている。

On the day Maya left, her father didn't pretend that they might meet again or hear from each other. “You'll be better off with your mother,” he had said. “it's all right if you have to forget about me. I want you to be happy.” (125)

マヤは二人が飛行場で別れた後の父親の姿を想像してさえみてそれに思いを馳せる。

After Maya had walked through her tunnel into the airplane, he would have gone up to

the observation deck and waved to her even though he knew she could not see him……
He would have stayed until the airplane taxied off and tilted up into the sky, turning
into a silver charm—the kind a woman might wear on a chain around her neck for
good luck. (148)

マヤは、父の友人クボが送ってきてくれた父の写真についてもいつも思いおこす。“She is recalling the black-and-white photograph Mr. Kubo sent her, of her father in the last years of his life. The image fills her mind like a view from the sky.” (163)

父親はマヤとの思い出を断ち切るため、幼いマヤが父親を忘れ母親との暮らしをうまくやっていて欲しいために、マヤが何度手紙を書いても必ず読まずに返送してきた。

父親が他界し二度と会うことができなくなった今、マヤは簡単にあきらめずに、もっと執拗に手紙を書いたり、あるいは大阪に会いに行ったりすべきだったのか悩む。しかし、父親にそっくりな自分がそのような行動には決して出ることができないと思う。“She did not do any of these things because—like him—she was quiet and sad, pure-minded and proud in the wrong way.” (164)

マヤはやがて父の面影があるエリックを恋するようになるのだが、自分が飼っている猫Casperについてエリックに語る。

I found Casper a month after my father died. I wanted to believe that my father had sent him to console me. A long time ago, my father took me to a weaving cottage where we saw a beautiful black cat. Casper could have been his counterpart, all white instead of black. I loved traveling with my father. I was so proud to be with him. (201)

マヤは、夫のジェフには語らなかつた自分の子ども時代のことをエリックには饒舌に語る。

父親が髪を洗ってくれたことを伝え、さらに“At my house, it was my father who took care of me when I was little. My mother wasn’t around much. She was taking classes and teaching at a university. Some days, I didn’t even see her.” (202) と語り、母親がめったに家にいなかった母親失格のような女性であったことを打ち明ける。

マヤの名付け親もまた父親であった。“He had named her *Mayumi*, true arrow, because the name suggested strength and fidelity. (208)

一方、マヤと母親のケイは親子でありながらもお互い相手を疎んでいる。二人が一緒にいると必ず諍いをはじめるとは次のように語られている。

Maya couldn’t stay for more than a few days at a time because Kay criticized everything she did……After five minutes in the same room, they would be saying all the wrong things—the same wrong things they’d already said a thousand times. The only way they can be at peace might be not to see or talk to each other ever again. (99)

マヤの母親のケイが“I don’t think you understand how unhappy I was there [Osaka] once.” (143) と自分が日本で少しも幸せではなかつたと言うと、マヤは激しく母親を攻撃する。

Even if you were, it’s unfair to blame my father and make it sound like he was some kind of a monster. You were unhappy in Minnesota, too. You spread your unhappiness

around and blame other people…… I wish you'd left me alone…… I hated living with you. (143)

このように、母親が愛する父親を悪者にしようとする、マヤは一層、母を憎むようになる。母娘の諍いは激しさを増す。離婚した夫婦が子供を自分の味方につけたいがために、相手の悪口を言うのは常套手段であるが、ケイもまた “You never really knew your father. You were too young.” (144) と言う。しかし、マヤの言葉で悪かったのは母親であることが示唆される。“How can you say that? I was with him the whole time. You were seldom home even before you left us.” (144) ここには、外交的で滅多に家にいることもなかったケイの日本での生活が示唆されている。だが、執拗なケイは元の夫の悪口を言い続ける。夫に生活能力が欠けていたこと、もしもマヤを愛していたなら手放したりはしなかったろうと決定的なことをマヤに言う。

Your father chose his work over you. If he had wanted to give you a better home, he could have asked his father and his brother for help. They had money and influence. They could have found him a real job, a second marriage, anything. But your father wasn't willing to change his life for you. He didn't love you enough to give up being a poor artist. He sent you to me so he could live his own life. He didn't choose you. (144)

これに対し、マヤは “You're wrong,……My father let me go because he loved me. He gave me up because you convinced him I'd be better off with you. Letting me go was a sign of love.” と否定するのだが、母親は譲らず、“That's pathetic. He let you go because it was convenient, because he'd rather be an artist than a father.” (144) と追い討ちをかける。

このように少しも心が通い合わない母娘ではあるが、どちらかが一方的に悪いのでは、なく母親が現在のような状態に陥ったのは、娘マヤのせいでもあるのだと、モリは読者に示唆してもいる。このことは、次ぎのように、母の現在の夫、ネイトが語る。

Your mother is a beautiful soul who's been hurt a lot ——by you, mostly, but by her other husbands too. My job is to protect and nurture her, not criticize her and make her feel worse. I'm her peace-maker. (238)

モリは以前の作品においても、登場人物を過去の自分の生い立ちに則って徹底的に攻撃することもあるのだが、必ず、最新作におけるネイトのように、その攻撃の刃を向けられた人物をやさしく理解するような応援者を設定する。このことが、モリの作品に一抹の暖かく柔らかな光のようなものが感じられる由縁ではないだろうか。

3. 女性同士の連携⁴⁾

マヤは、憎むべき母親ケイが心を許しあう女友達を持っていないようだと思う。ケイが周囲の女性に対して非常に批判的であることが次ぎのように述べられている。

Kay seldom says anything nice about other people, and the few she's spoken of with begrudging admiration were always men. For women, she has nothing but contempt. “That woman, she's just a housewife, “ she would declare, “so we have nothing in common.” The women she worked with, on the other hand, were all backbiters and

brownnosers, according to Kay. (232)

ここには、一人の女友達もなく若い夫だけが彼女を受け入れてくれているというケイの姿が描かれる。しかし、娘のマヤにはYuko という親友がいる。ユウコ は夫に浮気され、彼は妻のユウコを捨てて、恋人のもとへ去る。「自由になれた」と言うユウコにマヤは “To your freedom…” と言い、二人は次のような会話を交わす。

“And to us. You’re still with me. You’ll never lie to me and take off.”

“Of course not.” They clink their glasses and take a sip. Outside, the snow continues to fall (46)

こうして、二人は変わらない女性同士の友情を確認する。このようなユウコは、女性だけのメンバー、しかもアジア系アメリカ人で構成されたロックバンド、the Demographicsという音楽グループで演奏している。“Yuko has been playing with an all-female, all-Asian-American rock band called the Demographics. (60) モリはこのように女性同士の連携についていつも語る。

最終部で、ジェフと離婚することになったときマヤは、次のように思う。

If she were to live on her own again, Maya might feel like a bird migrating back to a place far away and yet familiar. She would be with a multitude of women traveling in the same direction—Yuko, Lillian, many of her customers and some of the women who own businesses around town. She would join a great migration of women, from solitude to marriage and then back to solitude. The sequence of women’s lives may be as much a part of the natural order as the migration of birds. (158)

このように女性同士の連携はモリのテーマの一つになっており、その関係が大変強いものであることが、ジェフによる、妻がレズビアンであるのではないかと疑うほどであることからわかる。二人の友情が非常に厚いことが次のように示されている。

I wouldn’t have been surprised if you told me that she [Yuko] and you had been lovers all along……Maybe you could never love me, because all along, you were in love with her.” (255)

4. マヤの過去と孤独

10歳のとき、無理やりに父親と離されたマヤは、自分の過去について語ることを嫌う。マヤはかつて、つきあった男性Scott から “You’re afraid to love me because of what happened in your family.” (70) といつまでも過去に起きた自分の家族の記憶にとらわれつづけることを非難されたことがあった。

マヤは父親と別れた空港の場面をトラウマのように忘れることができない。

As the plane had climbed into the sky, Maya could see the blue water of Osaka Bay below. The land curved around it in the shape of a bow, just like in her geography book. *I won’t ever see this water again*, she had thought, and started to cry. (166) (イタリックス 原文)

この後、マヤはミネアポリスに住む母親に迎えられるが、3年ぶりにあった母親はアメリカ暮らしのために、様子が違っていて誰だかわからなかったほどであり、母親が泣きながら抱きしめてくれても困惑していた。その上、父親と別れたことのショックで2日間口が聞けなかったほどである。

このような生い立ちを持ったマヤではあったが、高校教師をしているアメリカ人男性と結婚した。彼女が30歳、ジェフが35歳のときに二人は初めて会ったわけで、晩婚であったことから“*They’d already lived a whole lifetime without each other.*” (63) と、二人がそれぞれの世界をすでに持っていたカップルであったことが示されている。二人はときどき小さな喧嘩をする。例えば、ジェフは“*Everything is a joke to you,……You’re so quiet most of the time, but in your head you’re always making fun of people. You should have a little more compassion*” (63) と言って、マヤが、寡黙でありながらも頭の中ではいつも周囲の人を蔑む冷酷な皮肉屋であると攻撃する。

このような不安定な夫婦関係にあったマヤ、そしておそらくは実生活でアメリカ人男性と離婚を経験した作者モリもまた、結局は、他人とうまくつきあっていくことができないタイプの女性なのではないだろうか。ジェフとの関係は次第に息苦しくなってくる。“*She has a sinking feeling that they made a mistake in marrying each other, that the end is as inevitable as the approach of spring.*” (88)

そして二人は些細なことで言い争うようになる。ジェフは、妻であるマヤの態度にそれまでは口になできなかったようなことを言う。

Why do you always do exactly what you want without any consideration for me? If that’s how it’s going to be, I don’t want any part of this anymore. You should just go and be by yourself. (89)

マヤがいつもジェフに何も相談することもなく自分の思うように行動することについてある日、本音で責めてしまうのである。そして、事態は一層悪化したことは、“*She [Maya] and Jeff will go on hurting each other until they can get away from it and be alone.*” (100) という文章に示されている。

そして、マヤが自ら孤独を好み人と真剣に向き合うことができない性格であることがわかる。ジェフと別れることになったとき、二人は次のような会話を交わす。

…… “*What about you? What do you want?*”

“*What I want hasn’t changed. Some days, I’m glad we’re together. Other days, I wish I’d stayed alone. But that’s how I’ve felt all along.*”

“*Even at the beginning?*” ……

“*Yes, even at the beginning…… I’ve always liked being alone You know that.*” (156)

ここには、結局は一人でいることが一番心が落ち着くというマヤの本心が述べられている。そして、やがてマヤは知り合ったエリックと激しい恋に陥る。それでも、自分が誰ともうまく関係を続けていくことができないと知っているので、次のように思う。

But it is too late. A long time ago, she decided to find comfort in solitude and peace; alone in a dark basement room, she slowed her heart and prepared herself not to love. When her marriage ends, she will go back to the quiet life she has known a long time. (164)

マヤは思う。“Love isn’t always about holding on. Letting go can be the ultimate act of love and mercy. (177)

マヤは父親の写真を眺め次のように思う。

In the photograph, his eyes appear sorrowful, his forehead etched with deep lines of loneliness. He would have looked less pained, ……if he had never gotten married and had been alone all along. His solitude then might have been tolerable or even satisfying, a peaceful life dedicated to work. But once a person falls in love, being alone is never the same. (209)

そして、愛するエリックとも別れようと決意したマヤは、“For the first time, she will know the solitude her father endured.” (209) と思う。エリックが手紙を書かせてと言うと、マヤは次のように語り、これからは、一生一人で生きていくと宣言する。

“I wish you wouldn’t. I need to start being alone. It’s what I’m going to do for the rest of my life. It’ll only hurt me to get letters from you. I don’t know if I can bear to read them.” (213)

マヤはいつも一人でいることが好きだった。

Ever since she left her father’s house, Maya has known she was meant to live alone. Solitude has been her calling the way devotion is for other people. Nearly all her father’s stories had the same ending; love, no matter how deep, cannot alter anyone’s destiny. (217)

このようなマヤであるから、離婚することになったジェフから次のように言われる。

You come across like such a polite, peaceful person, but that’s just your façade. You’re cold and calculating. I never met anyone so unfeeling. You care only about yourself. You don’t want to get close to people. You’ll never be happy in your life. (248)

父親に似ているエリックを愛するようになるマヤであるが、やはり人と真摯に向き合うことが苦手なマヤはエリックと別れることを決める。“Instead, she could be living alone in this loft—a simple, pure life. (274)

こうして、モリの作品では、いつも人と上手に交わることが苦手な女性主人公が描かれ、このことは作者モリ自身の姿がこのような主人公に反映されているのではないだろうか。

5. 日本性への思いと批判

マヤの母親が激しい性格であることは、若いアメリカ人のネイトと結婚する前、彼女がいつも“The Japanese are such hypocrites” (68) と日本人の男性を「偽善者」だと断言していたことからわかる。ケイはさらに彼女の日本人観を次のように語る。

If you want someone from Japan, especially a man, to do you a favor, you have to

pretend that it's not important. Otherwise, they won't say yes and they won't say no. But if you pretend to be dumb, they'll let their guard down and you'll get what you want. I had to leave the country because I was too honest to play that stupid game. (68)

ここには、日本人の男性が女性に求めるものが知性や意思ではなく、常に男性に依存するようなへりくだった態度であるということが示唆されている。ここでは、ケイの娘マヤは、母親の激しさに辟易してはいるものの、作者モリの日本人男性観がケイのせりふを通して描かれている。

さらにマヤは父親の死について知らせてくれたクボについて、父親の最後の様子を詳しく知らせたいと手紙を書いたにもかかわらずなかなか返事をよこしてくれないことについて、クボが父の親友ではなかったのではないかと思う。そして、母親が次ぎのように言っていたことを思い起こす。“There's no real friendship in Japan……People don't talk about their feelings. Japan is the loneliest place on earth (108)

これは、モリが彼女の比較文化論『悲しい嘘』で繰り返された日本についての批判を思いおこさせる⁵⁾。しかし、本作品では、“People who leave their past in a foreign country can choose any new life.” (124) と前向きなコメントをするようになっている。また、これまでの作品同様に、本作品においても、捨て去った故国日本をなつかしむ場面もある。

The Zen masters in her father's stories were always trying to teach the same lessons to the young warriors who studied with them: *Be patient, because everything changes in time.* The truly enlightened people were quiet. The most revered masters, who meditated every day, could slow down their heartbeats until they only had to breathe once every five or ten minutes. (134-135) (イタリックス 原文)

マヤは別れた父親が昔話を語ってくれたことをなつかしく思いだす。漁師が海岸で天女の羽衣を見つけた話である。

The Milky Way is a belt of white light stretched across the sky. Ama no kawa, her father used to call it—the River of Heaven…… On the seventh of July every year, Maya and her father strung colored pieces of paper from bamboo branches with their wishes written in ink……The words she and her father wrote were large and all-encompassing; *happiness, safety, peace, strength.* (218) (イタリックス 原文)

このようにモリは 日本について批判したり、なつかしんだりして祖国日本について、心の揺れを見せている。やはり、モリが徹底的に避けてきた日本ではあったが、離れて暮らしてみても日本の良さも見えてきたのではないだろうか。

6. モリの変容

これまでのモリの小説では、いつも父親が悪者、母親が犠牲者というパターンで作品世界が展開した。また、モリの自伝や比較文化論では、モリ自身の赤裸々な過去が描かれているわけなので、自殺した被害者であった母親、母を自殺に追いやった自己中心的で誠意のかけらもない父親とその愛人であり後妻に入った継母のことが執拗に語られてきた。しかし、今度の作品では、母親が勝手気ままに、自分中心で、子供のことよりも自分を愛し、恋多き中年女のように描かれている。その一方で、10歳のときに無理やり別れさせられた父親については、物質的欲望とは無縁のひっそりと

生きる芸術家として描かれ、寡黙な、子供思いの徹底的な善人として、主人公マヤの忘れることができない理想的な父親として描かれている。

例えば、両親の決定的な違いは「言葉」に対する姿勢にも表れている。父親は「言葉」について、多くを語ることを望まない。母親は全てを「言葉」にする。

Her father taught her to say nothing when there was no consolation in words, while her mother spat out all her venom as if being honest and hurting people were the same virtue. (259)

日本を捨ててきて、アメリカで暮らしているモリにとっては、マヤの父に代表されるような控えめな態度に反発を抱くことがある。このことは、この作品の中でも語られる。父親の死を知らせてくれたクボが、マヤの問い合わせに答えてくれた手紙の中で、“Your father had a quiet peaceful life, and his death was also peaceful. You must believe that and pray for his spirit in the next life” (271) と述べる。癌についても告知されることなく死んだ父を思い、マヤは思う、“Kay had been right all along when she said that Japan was the loneliest place on earth.” (271) だと。

何も知らずに死んでいった父についてさぞ無念であったに違いないと思いを馳せる。

Even as he was suffering from pain and the fear of dying, Maya’s father had to pretend he did not suspect the truth and was completely at peace with his fate. He could not talk about his fears or regrets and hope to be consoled. For them [Mr. Kubo and his wife] —as for her father for most of his life—words must have seemed like a burden; silence was better than speaking the painful truth. (271)

モリがいつも真実について口を閉ざしてしまう祖国日本の姿勢に閉口して、自分は日本を後にしたというようなことをこれまで言ってきたが、ここにもそのようなモリの態度がうかがえる。

しかし、この最新作では、モリの変容が感じられる。モリが、むしろこのような日本の良さを感じることができるようになったようにも思える。事実、何でも言ってしまう母親のケイと、穏やかで静かで無口な父親のミノルは対照的な存在として描かれ、自分マヤは幸いにも父親に似ているというような描き方がされている。しかし、そう言いながらもクボが最後まで父に癌のことを告知しなかったことが本当に父にとって正しい選択であったのか、“A true friend would have grieved with him instead of remaining silent.” (272) と、非難する。これは、何も真実を語られることなく死んだ父を哀れに思ってマヤが言った言葉なのか、あるいは、これまでのモリのように、日本人の多くを語らない文化的姿勢について批判しているのかはわからず、モリの心に今も揺れがあるように思われる。

最新作において、何も変わっていない、単に男女の役割が入れ替わっただけと言う見方もできるが、たとえそうだとでもこれまで自分の過去から一歩も抜け出ることができなかった閉鎖的な世界からモリが初めて飛び出すことができたということになり画期的なことなのだと思う。

While her mother made her learn English, her father taught her the language of colors and light, of shapes and lines and angles. Even in their short time together, he gave a legacy. (205)

ここには、実戦的な父、芸術的な母というパターンが完全に入れ替えられている。

モリは、自伝の最終部で、自らを「母が自己の喪失感を生かして、より大きな世界へと解き放した娘」と呼び、「世界中どこにでも行けるし、母と同じ喪失感を覚えることはない」と言う⁶⁾。

そして、この作品の最終部においても、“Everyone is traveling on to some future, whether it’s the next life or the rest of this one.” (278) と述べ、人生は「旅」なのだと語る。

アメリカ人男性との13年間の結婚生活を清算し、子供も持たなかったモリにはアメリカにおける家族はいない。しかし、モリは「孤独」「一人きりでいること」を恐れてはいない、強靱な意志を持っている。この強さは、彼女の生い立ちから得ることができたものではないだろうか。モリはこの最新作において、主人公のマヤにもこの立場を背負わせている。

She will never be able to carry her father’s spirit out of this century into the next by having her own children. In thirty, forty years, her life will stop, leaving no trace of her parents of the long line of men and women who came before them. All she can do for her father is grieve for him and set him free—to let him disappear into the nothingness that is as big as the sky, full of air. (278)

ここには、10歳で生き別れになった、愛する父の亡霊に捕らえ続けていたマヤが、ようやく、解放され、父親の死を受け入れることができるようになったことが示されている。

これまで、母親の自殺という忌まわしい過去から解放されることができず、小説でも「良き」母親を死に追いやった「悪しき」父親というパターンにがんじがらめに縛られていたモリではあったが、ここにおいて男女の役割が交換されて、さらには、愛する人の死を受け入れることができるようになったことが描かれている。そして、やがては自らも老いて死んでいくという人間の真実をも静かに受け止めていこうという姿勢がみられる。

Even in the universe, nothing remains the same; old stars burn out and die, some of them sending out sparks that people for centuries believed were divine heralds, harbingers of a new order. It isn’t so terrible to be nothing, finally, to climb up to the sky alone to be part of the elements. (278)

このようによく過去から解放されたマヤは、ようやく、「孤独」からも自分を解放しようと思えるようになる。自分が宇宙の屑となってこの世から去るときまでに、自分も初めて人と真剣にかかわっていかうと思えるようになる。“For Maya, so much time is left before that final solitude. [death]” (279) そして、その孤独を癒してくれる人として、エリックを待っていたと思うようになる：“He [Eric] will call her and say he is coming to get her.” (279)

そして、この小説はようやく幸福になれそうなマヤの次のような描写で終わる。

Maya imagines herself up in the air, buoyed up by a sad, beautiful garment she has woven. With her eyes closed, she pictures the earth and the sky and reversed the axes of the universe; below her, the stars begin their slow rotation. (279)

この最終部は、織物工芸家としてのマヤがエリックとの出会いを通じて人と初めて向き合うことができるようになったとこと、ここに、作者モリの後ろを振り返るのではなく、前を向いて進んで

いくことができるようになったことが示されている。

筆者は、モリの今後の問題点として「母の過ちをも認め、父を許し、血縁への異様な執着を捨てることで、モリは、とらわれ続けた過去の呪縛から解放されて、真の意味でトランスナショナルになれるだろう。」と述べた⁷⁾。

本作品では、この過去の呪縛から解放されたことが、男女の役割を交換し、アメリカで暮らす主人公を描いたことでも示されていて、ここにモリが変容したことが垣間見える。

注

- 1) モリのこれまでの作品については、拙論、「キョウコ・モリの祖国日本——新移民の立場から」『東京成徳短期大学紀要』第39号（2006年、3月31日）47-55頁を参照。
- 2) Kyoko Mori, *Stone Field, True Arrow*, (New York: Henry Holt and Company, 2000), 9頁。
引用の邦訳は拙訳である。以後、同書からの引用は、その頁数を（ ）内に記す。
- 3) 本作品の書評は次のように、モリの世界を絶賛し、主人公の織物工芸家マヤのようにモリもまた、言葉を織っている職人であると見ている。
“This elegant, complex, and subtle novel is……at its core, about the efforts of a girl, now a woman, to find her self in a world ripped in half by divorce……[Mori’s] writing, particularly when Maya’s thoughts wander into a dreamy place from her father’s fantasy tales, is sumptuous.” (Charles A. Radin, *The Boston Globe*)
“Kyoko Mori is an artist with words. She stitches them together in phrases that make you catch your breath at the aptness of a metaphor or the sharp sting of truth.”
(Linda Brazill, *The Capital Times*)
“Mori is a masterful weaver, working with threads from ancient tales, interlacing the present, personal history, and the mythical past into a tapestry……The artistry of the author is apparent from beginning to end.”
(Luanne Lanke, *Milwaukee Journal Sentinel*)
- 4) モリの作品における女性同士の連携については、拙論（注の1参照）の「女の居場所」という章（2の（3））で詳説した。
- 5) モリの日本についての批判については、拙論（注の1参照）の「新移民から見た日本」を参照。
- 6) Kyoko Mori, *The Dream of Water: A Memoir* (New York: Fawcett Columbine, 1995), 275頁
- 7) 拙論（注の1参照）の「モリの問題点と今後」を参照。

参考文献

- Mori, kyoko. *The Dream of Water: A Memoir*. New York: Fawcett Columbine, 1995.
Mori, Kyoko. *Fallout*. Chicago: Tia Chucha Press, 1994.
Mori, Kyoko. *One Bird*. New York: Fawcett Juniper, 1995.
『めぐみ』池田真紀子訳。青山出版社、1996年。
Mori, kyoko. *Polite Lies*. New York: Henry Holt, 1997.
『悲しい嘘』部谷真奈美訳。青山出版社、1998年。
Mori, Kyoko *Shizuko’s Daughter*. New York: Ballantine Books, 1993. 『シズコズドーター』池田真紀子訳。青山出版社、1995年。